

FORUM

Vol.42

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第42号

CONTENTS

巻頭言 2

工学研究科副研究科長・高等教育開発センター副センター長
新井 隆景

コラム 3

英語学習今昔

人間社会システム科学研究科・人間社会学専攻長
相田 洋明

授業報告 4

人間社会システム科学研究科・地域保健学域 教育福祉学類
吉武 信二

研修報告 5

学生課学務グループ
榎本 貴幸

2020 年度活動報告 6

編集後記 8

巻頭言

工学研究科副研究科長・高等教育開発センター副センター長

新井 隆景

ARAI TAKAKAGE



新井 隆景

ARAI TAKAKAGE

1985年東北大学大学院工学研究科機械工学専攻博士課程後期3年の課程修了（工学博士）、東北大学助手、室蘭工業大学助教授、アメリカ合衆国ヴァージニア工科大学客員研究員を経て、2005年大阪府立大学大学院工学研究科航空宇宙海洋系専攻航空宇宙工学分野教授、現在に至る。高等教育開発センター長、機械系学類長、航空宇宙海洋系専攻長を歴任し、現在は工学研究科副研究科長ならびに高等教育開発センター副センター長。専門は航空宇宙工学、空気力学、流体力学で、スクラムジェットエンジンにおける燃料の超音速混合促進に関する研究等を行う。

コロナ禍で大学の授業について考える

今年度はコロナ禍ではじまり、その第3波の中で年度を終えようとしている（本稿は1月中旬に脱稿）。本学でも、他大学と同様に、前期は実験等の一部の科目を除いてオンライン授業となり、後期は基本対面授業でスタートしたが、12月上旬に大阪モデルのレッドステージ（非常事態）移行を受けて、実験演習等を除いて、再びオンライン授業となった。授業形態として、これまで座学で行っていた授業はオンライン授業で実施可能となったと思われる。このことをどのように我々は解釈すればよいのであろうか。IT技術の発達により、オンデマンドの講義はできるし、実施しようと思えば同期型の講義もできる。学生もオンデマンド型の講義に一定の評価を下している。小生のオンライン授業のやり方は以下のとおりである。資料をパワーポイントのファイルあるいはPDFのファイルで作成し、Zoomのレコーディング機能を使って説明動画を作り、授業支援システムにアップロード、それと同時に課題をアップロードしている。他の教員の方もほぼ同様の形態なのではと想像する。この中で、説明動画であるが、一方的に説明してしまう傾向があり（小生だけかもしれませんが）、対面講義で行っているように、学生の顔色（理解度）を見ながら繰り返し説明したり、身近な例を引用して説明したりすることが困難になっている。極め付きは、授業で脱線できないことである。大学の授業のだいご味は、教員の人間性が出るこの脱線にあるのではないかと小生は常々考えてる。この

脱線の程度は、学生たちの反応度合いに依存する。ジョークを飛ばし、こちらに注意を向けようとする教員の涙ぐましい努力でもある。こんなことを考えているのは、古い時代の教育を受けたことによるのかもしれない。

大学は社会形成の場（人と人の繋がりにより、大小の多くのコミュニティが形成される）であるとも考えられる。今年の大学1年生は4月からほとんど登校しておらず、友人関係の構築が困難になっているとの報道もある。本学でもこれを懸念し、2020年11月には、新入生歓迎イベントを実施したところである。人と人との繋がりを大切に、大学生活が充実したものになることを切に願っている。

動物とは「うごく」「もの」と書く。動物は自らの意思による「移動」により、他の個体と触れ合うことができる。そのことにより、自分の存在意義を確認し、仲間を見出し、社会を形成しているのではないだろうか。Face-to-Faceの重要性がここにあるように考えている。IT技術を使えばテレビ電話等で顔を見ることができ、コミュニケーションもとることができる。ヴァーチャルリアリティの世界はますます現実の世界との距離を縮めていくだろう。その時、人間の持っている動物の本能がどのように反応するのか。大学の授業もヴァーチャルリアリティの世界に対応して変化する必要があるのであろうか。我々の目標の一つは学生の持っている能力をいかに引き出すかである。小生には解が見つからない。

英語学習今昔

日本人にとって英語はつねにショックとともにやって来る。一度目が幕末維新の動乱、二度目が太平洋戦争の敗戦、そして三度目が現在のグローバリゼーションの大波である。それぞれの時期、日本人は果敢に英語学習に挑戦した（している）。

日本人の最初のネイティブの英語教師は、ラナルド・マクドナルドという人物である。マクドナルドは、1824年現在のアメリカ合衆国オレゴン州に生まれた。日本に強い関心を持ち、日本が開国する暁には諸外国との通訳を務めたいと考えた彼は、1848年漂流民を装って北海道の焼尻島に上陸した。その後長崎に連行され牢に入れられたが、そこに当時の長崎のオランダ語通詞たちが英語を教わろうとやって来た。マクドナルドの回想記から彼らの学習の様子を見てみよう。

私に英語を音読してみせることが、生徒たちの習慣で、一回に一人ずつ音読した。（中略）ある種の組合せの発音は、とくに発音しにくいようだった。たとえば、彼らは l の文字を発音できない。できたとしてもきわめて不完全だ。彼らは l を r と発音する。（中略）彼らはまた、子音のあとの末尾に、i（短音のイ）あるいは o（オ）を加える習慣があった。（『マクドナルド「日本回想記」』〔再訂版〕刀水書房、2012、148頁）

l と r の発音の区別が苦手なこと、単語の最後に母音を加えてしまうこと（なぜなら日本語の単語は必ず母音で終わるので）が指摘されているが、現在でも同じ弱点を私たちは抱えている。道遠し、である。

さて、日本初の英会話教本は、1859年に中浜万次郎（ジョン万次郎）によって出版された『英米対話捷徑』である。この本では、英語の発音をカタカナで記している。2つだけ例を挙げよう。

I am sorry to hear that your Grandfather is セッキ.
I had no sleep ラスト ナイ.

「セッキ」は sick、「ラスト ナイ」は last night である。それぞれ「シック」「ラストナイト」と書かないところに、万次郎の本当に自分の耳で学んだ英語の力が現れている。

『英米対話捷徑』から160年以上たった現在、英語の学習環境は激変している。機械翻訳が実用に堪えるものとなり、それらをどう活用するかが英語教育の一つのポイントになりつつある。そこで、機械翻訳の実力を試すために、府大の入試問題（2019年度一般前期英語）を解いてもらおう。

以下の日本語を英語に訳せ。「絵を見るという行為は、いつでも、作者の見た目で、世界を見るという行為です。」

Google 翻訳の解答。“The act of seeing a picture is always the act of seeing the world with the appearance of the author.”

Google 翻訳は、「作者の見た目で」を「作者の外見で」と解釈して、with the appearance of the author と誤訳している。（人間には思いつきにくい誤訳だと思われる。）まだまだ人間の英語教師の出番はありそうである。



相田 洋明 SODA HIROAKI 人間社会システム科学研究科 人間社会学専攻長

1987年京都大学大学院文学研究科修士課程修了、同年大阪府立大学総合科学部助手。その後、講師、助（准）教授を経て2013年大阪府立大学大学院人間社会学研究科教授、2017年大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授・言語文化学専攻長。2018年より人間社会学専攻長。専門はアメリカ文学。

オンライン講義の工夫と検討 —受講者目線から見た望ましい授業をめざして—

吉武 信二

(人間社会システム科学研究科・地域保健学域 教育福祉学類 教授)

新型コロナウイルスの出現により、2020年の大学における授業は十分に準備する間もなくオンラインでの展開を強いられました。戸惑いながら手探りで授業を進めざるを得ない状況に、私も4月は考え込むばかりで作業が進まず、正直途方に暮れましたが、できることをやるしかないと思い直し、とにかく受講者目線で心地よい授業をめざそうと考えました。

たまたま私にはこの春から(某地方大学の)大学院生になった娘がおりまして、入学直後からキャンパスに通えず、下宿先でオンライン授業に明け暮れる生の声を遠方からLINEや電話で聞く機会がありましたので、何に困りどんな授業を望んでいるのかを尋ねてみました。

娘が言うには、とにかく先生によって様々な形態の授業があるが、一番困っているのが「課題が毎回のように出されて負担が重だけでなく、課題の指示があいまいでよくわからない授業」とのことでした。一方、ありがたいのは「少しでもいいから先生の顔や表情、声を感じられ、スライド提示がある授業形態」であり、できれば「質問に対する何らかのフィードバックがあること」や「いつのタイミングで受講するのがいいかがある程度わかること」を望んでいました。

そこで、学士課程の講義科目「教育福祉と健康」の授業をオンライン非同期で展開するにあたり、この点を参考にしました。

まず、授業支援システムの最上段欄に「はじめにお読みください」というリンクを貼り、PDFで受講手順や課題の量などを詳細に指示しました。そして、1トピックに1回の授業に相当する動画(15分程度×3～5個)を受講日の前日までにアップし、内容構成は二次使用に関する注意→冒頭教員挨拶(顔出し・BGM付)→前回の学生からのコメントに対するフィードバック→本時の内容→次回予告→リアクションコメントの入力確認という流れにしました。動画作成はパワーポイントの「スライドショーの記録」機能を使って動画挿入や音

声録音したものを「ビデオの作成」でエクスポート→HandBrakeを使って圧縮処理→Microsoft Streamにアップロード→授業支援システムにアクセスリンクを設定という流れで行いました。さらに、非同期型で受講時間の自由度を保障しつつも規則的な学習計画を推進するため、本来開講していた時間をベースに「推奨する受講時間帯」を学生に示しました。あと、できるだけ対面授業を受けているような雰囲気を感じてもらえるように、「原稿読み口調」でスラスラと話すのではなく、たとえ囁む場面があってもあえて話しかけるような普段の「しゃべり口調」で解説を進めるように心がけました。

結果、学生からはおおむね好意的なリアクションコメントを多く頂くことができました。学生からのコメントに毎回フィードバックを返すのは結構手間がかかる作業で大変でしたが、学生からは非常に好評という印象もあり、丁寧に対応しました。また、ある程度受講時間帯を指定(制限)した方が、学生のコメントに適切なタイミングでフィードバックができますし、むしろ計画的にしっかり受講・学習できていると強く感じました。今回学生に授業説明と受講時間への配慮を丁寧に実施した甲斐もあってか、これに対する不満や苦情はほぼありませんでした。作成教材の二次使用防止や引用資料の著作権保護の観点からも、この「受講時間のある程度制限する非同期型」という形式を継続したいと考えていますので、ご理解頂きたいと思います。あと、単調な「原稿読み口調」よりも「しゃべり口調」で解説したほうが、長時間動画を見る学生の心理的な負担を軽減できているように感じました。また、学生から「顔出し」と「BGM」が授業への意欲を向上させるといったコメントが複数あり、これも継続していきたいと思います。

以上、主観的ではありますが、この1年悪戦苦闘した私のオンライン授業報告でした。何かの参考になれば幸いです。

「業務における後輩指導」を受講して

学生課学務グループ 榎本 貴幸

〈当日の内容〉

2020年11月18日、人事課、高等教育開発センター共催の「業務における後輩指導」をオンラインで受講しました。講師は、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室の竹中先生です。研修は、指導者としての目線で適切な指導を行うための基礎知識と技能を習得することを目標として設定され、そのための方法として、指導の指針、学習目標の設定、指導方法の工夫、学習のフィードバックに分類され、それぞれについて説明がありました。この中で学習目標の設定については、グループワークがあり、指導対象者の目標設定の方法についてグループ間で意見交換をしました。また、指導方法の工夫について課題分析におけるスモールステップの原理の作り方を参加者全員で体験しました。

〈研修を受けての感想〉

私は、本学に入職して10年目で、さらには役職に就いて4年となりました。中堅職員となり、立場上、後輩や部下に指導する機会が増えているものの、「後輩指導」というものに本腰を入れて取り組めずに来ました。この研修を通して「後輩指導」とはどういうものか考える良いきっかけとなりました。

「指導」というと先輩から一方的に「説明」や「指示」があって、後輩はそれをただ聞くだけというイメージがありました。また、その指導方法の効果の限界も感じておりました。

今回の研修においては、指導を受ける後輩のことを、いかに考えるかという視点が大事かということに気づかされました。研修で紹介された指導技術で「発問」という手法を紹介します。これは、先輩が問いを投げかけ、後輩に思考させるというものです。研修では、LINEで相手にメッセージを送るときに「？」で終わらせるようなものと表現されていました。一方的に、情報を与えるのではなく、相手に考えさせることが、この手法のキーポイントとなります。ただ、考えさせることだけを求めてしまうと、一方的な指導と変わらないので、絶妙な「発問」をすることが先輩の腕の見せ所だと感じました。当たり前ですが、後輩との関係性も、良好にしておくことが大事ではありますが…。

〈指導者としての理想〉

実は、竹中先生と私は某大学で、職員と学生スタッフという関係でした。大学職員の道を考えるようになったきっかけを与えてくれ、今こうして職員として大阪府立大学で働けているのも竹中さん（親しみを込めて「さん」づけで呼ばせていただきます。）のおかげです。恩義ある方と、こういった形で仕事に関われることは嬉しくもあり、どこか懐かしさも感じながらの研修となりました。当時、竹中さんがされていたような「後輩の指導」を、今の私自身が出来ているかどうかは分かりませんが、目標とする竹中さんのような「指導」を出来るように頑張っていきたいと思います。

高等教育開発センター

2020年度活動報告

セミナー・研修会等の実施

高等教育開発センター主催セミナー・研修会等

セミナー・研修会	内 容	年 月 日
新任教員 FD研修 (オンデマンド)	「授業における ICTの活用について」 「FDに関する調査」 「授業を育てる」 「データから見る府大生の特徴」	2020/4/1
Zoom活用講座 (オンライン開催)	岩居 弘樹氏(大阪大学 サイバーメディアセンター 教授) 司会: 星野 聡孝(高等教育開発センター長・教授)	2020/4/15
内部質保証スタートアップ 支援事業成果報告会 共催: 教育戦略室 (オンライン開催)	第1回「質保証の指針・評価体制の構築」 「教育の内部質保証に関する調査・研修事業」 大塚 耕司(現代システム科学域 教授) 「JABEE認定による教育の経験に基づく内部質保証への取り組み」 中谷 直樹(工学域 教授) 「理学類における学士教育プログラムの教育効果の検証と質の向上」 麻田 俊雄(生命環境科学域 教授) 司会: 畑野 快(高等教育推進機構 准教授)	2020/6/23
内部質保証スタートアップ 支援事業成果報告会 共催: 教育戦略室 (オンライン開催)	第2回「国家試験に関わる学類の取り組み」 「meaQs/forQsシステムを用いた学修成果の把握と心理教育プログラムの評価」 岡本 真彦(現代システム科学域 教授) 「獣医学教育の評価の実施」 岡田 利也(生命環境科学域 教授) 「専門分野教育領域における学修成果の客観的評価」 片岡 正教(地域保健学域 講師) 司会: 畑野 快(高等教育推進機構 准教授)	2020/7/6
「授業デザイン研修Ⅰ」 (オンライン開催)	・ミニ講義1「授業の目的と達成目標」 畑野 快(高等教育推進機構 准教授) ・ミニ講義2「アクティブ・ラーニング」 畑野 快(高等教育推進機構 准教授) ・ミニ講義3「授業のフレームワークを作る」 星野 聡孝(高等教育開発センター長・教授) ・ワーク「ミニ授業の準備」「ミニ授業」	2020/7/27
「授業デザイン研修Ⅱ」 共催: 大阪市立大学 (オンライン開催)	・ミニ講義1「授業科目の目的と達成目標」 畑野 快(高等教育推進機構 准教授) ・ミニ講義2「授業計画」 星野 聡孝(高等教育開発センター長・教授) ・ミニ講義3「成績評価」 畑野 快(高等教育推進機構 准教授) ・ワーク、発表	1回目 2020/10/27 2回目 2021/2/9

高等教育開発センター共催セミナー・研修会等

セミナー・研修会	内 容	年 月 日
2020年度 第1回工学全体 FDセミナー (オンライン開催) 主催: 工学域・工学研究科 教育運営委員会、 高等教育開発センター	「オンライン授業のデザインとすめかた」 講師: 高橋 哲也(副学長・教授) 星野 聡孝(高等教育開発センター長・教授) 畑野 快(高等教育推進機構 准教授) サポート: 小島 篤博(人間社会システム科学域研究科 准教授) 司会: 畑野 快(高等教育推進機構 准教授)	2020/5/26
2020年度 第2回工学全体 FDセミナー (オンライン開催) 主催: 工学域・工学研究科 教育運営委員会	「研究室指導に必要なコーチング技能入門 WSー学生が自己効力感を高める工夫ー」 講師: 浜野 学氏(芝浦工業大学 工学部電子工学科 教授) 司会: 秋田 成司(副学長(入試担当)、副工学域長 教授)	2020/9/7
法人職員ステップアップ研修・ SDワークショップ(オンライン開催) 共催: 人事課	「業務における後輩指導」 講師: 竹中 喜一氏(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 講師) 司会: 畑野 快(高等教育推進機構 准教授)	2020/11/18
大阪府立大学工業高等専門学校 FDセミナー(オンライン開催) 主催: 府大高専 AL研究会	「オンライン授業の工夫」 講師: 畑野 快(高等教育推進機構 准教授)	2020/11/30
FD・SD研修(オンライン開催) 主催: 大阪府立大学アクセスセンター、 大阪市立大学障がい学生支援室	「障がいのある学生を支援するための全学的組織体制」 講師: 村田 淳氏(京都大学学生総合支援センター・障害学生支援ルーム チーフコーディネーター / 准教授)	2020/12/24

印刷物、メール発行

名 称	内 容	発行 月
「フォーラム」第41号	巻頭言、コラム、授業報告、FD セミナー報告	2020/11
「フォーラム」第42号	巻頭言、コラム、研修報告、授業報告、2020 年度活動報告	2021/ 3
「ニュースメール」配信	センターの活動予定・報告、センターウェブサイトの紹介、FD・SD 関連研究集会等のお知らせなど	全3回配信

学習・教育支援サイト（ポートフォリオ）の運用

学習と教育の継続的自己改善などを支援するための「学習・教育支援サイト（ポートフォリオ）」の運用を行っています。学域生には、本サイト上で半期毎に「半期学習目標」「授業ふり返り」「半期ふり返り」を入力してもらい、また院生には「授業ふり返り」を授業アンケートとして回答してもらっています。本サイトは、学生の学習ポートフォリオとしての役割を担うだけでなく、授業担当教員による授業分析や学生アドバイザーによる学生指導に役立てられるようになっています。

今年度は、新型コロナウイルスの影響でオンライン授業が広く行われ、学生の学びが大きく変わることとなりました。その変化を、ポートフォリオのデータで可視化するなどの取り組みを行うとともに、2022年度大学統合後の新システム運用開始に向け、システムの具体的な設計作業を開始しました。また、参画している「eポートフォリオによる学修成果の可視化コンソーシアム」にて、定例研究会を行うなど大学間の連携を進める取り組みを行なっています。

教学IRへの取組・学生調査の実施

・大学IRコンソーシアム

「大学IRコンソーシアム」は、2009年度から2011年度まで採択された文部科学省「戦略的大学連携支援プログラム－相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出－国公立4大学IRネットワーク」、2012年度から2016年度まで採択された大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制（IRネットワーク）による学士課程教育の質保証（北海道大学・お茶の水女子大学・琉球大学・大阪府立大学・玉川大学・同志社大学・関西学院大学・甲南大学）」から発展、事業承継し、2020年12月現在、正会員60大学、賛助会員5社が参加しています。学生調査・卒業生調査の実施等の取組を継続的に発展させ、わが国の高等教育機関での教学IRの基礎データの提供と分析を行うとともに質保証のための教学評価コミュニティを形成しています。

2018年4月「一般社団法人大学IRコンソーシアム」として法人化。本学の高橋哲也副学長（統括）は法人化前の2016年4月から会長、法人化から2020年5月まで代表理事を務め、現在は理事に就任しています。今年度は10/15、11/26に会員向け講演会をオンラインにて開催し、会員校における学生調査（一年生調査・上級生調査）データの分析・活用事例の共有や意見交換を行いました。また3/22から3/24には当法人、大正大学EM研究所及び大学IR総研による合同シンポジウム及び勉強会のオンライン開催を予定しています。当法人のIRシステムでは学生調査データを登録し集計結果を公開していますが、今年度は卒業生調査も登録・結果公開するためシステムを追加改修し、会員校間における更なる利便性、データの充実性を図るべく活動を推進しています。

・学生調査の実施

大学における教育の成果を測定することを目的として、学生調査を行い、学内の様々なデータと連携して分析し、質保証と教育の改善に結びつけることを目指しています。今年度は、コロナ感染拡大予防の観点から、紙で配布する形式ではなく、webで調査を行いました。学生調査の結果（件数・集計）および、完成した分析報告書は、FDに関する全学委員会（教育改革専門委員会）で報告するとともに、センターのウェブサイトに掲載しています（学内限定）。

今年度は、大学IRコンソーシアムの共通調査である卒業生調査（8月～9月）、一年生調査（10月～12月）、上級生調査（10月～12月）に加え、卒業予定者アンケート（12月～3月）をWeb実施しました。調査結果については教育改革専門委員会でも報告し、学類ごとの集計結果を高等教育開発センターのウェブサイトです校内向けに公開しています。

【詳細はこちらに掲載しています。】

大学IRコンソーシアム：<http://www.irnw.jp/>

「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」の取組

東北大学、熊本大学、大阪府立大学、立教大学および連携企業・団体による取り組み「創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム」が、令和元（2019）年度文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」に採択されました。国公立4大学が企業・団体と連携して、産学連携教育イノベーター育成コンソーシアムを設立し、実務家教員を育成する「産学連携教育イノベーター育成プログラム」を履修証明プログラムとして開発・実施します。本学は専門領域別科目「アントレプレナーシップ教育力育成コース」を提供します。（事業期間：2019年度～2023年度、補助期間：2019年度～2021年度）

今年度は、専門領域別科目「アントレプレナーシップ教育力育成コース」パイロット版プログラムを開講しました。また、2021年度開講の研修プログラムにおけるコンテンツ開発及び研修コース内容の検討・設計を行いました。11月に東北大学・熊本大学が「産学連携教育イノベーター育成プログラム」（第一期生）を開講し、本学は「大学教育基礎力科目」に2つの学習項目を提供しました（高橋哲也副学長「教育改善論」、松井利之教授・広瀬正特認教授「実務家教員論」）。加えて、授業内での学生の能動的学習を促すツールとして、本学の教育支援システムにて動作するwebクリッカーを開発しました。2021年3月には「大学改革を担う実務家教員フェア2021」をオンラインにて開催しました。

学生FDスタッフ活動

本学では、2012年10月より、教職員と協働で、教育改善について提案していただける学生を募集し、高等教育開発センターの下部組織である「学生教育改善室」のスタッフとして、教育改善活動（FD活動）を中心に様々な企画を立ち上げ実施しています。

今年度は、5月・6月に主に1・2年生を対象とした「情報検索及びレポートの書き方をレクチャーする企画」を実施し、合計46名が参加しました。本来は対面で行う予定だったところ、オンラインでの実施となりました。特に新入生は大学でのレポートに慣れず、大学に来られないため相談ができない時期の企画だったため、有意義なものになりました。また、1月には普段接点の少ない教員と学生がコミュニケーションを取れる場を作ることを目的に企画した「OPUパーティ」をオンラインで企画する予定です。2020年度より開始された「創薬科学副専攻」をピックアップして、創薬科学研究について話していただく予定です。

これらの取組に加え、web上にある各学類・課程や研究室の情報について調べ、それらをまとめた資料を公開できるよう準備中です。

編集後記

今年度はCOVID-19感染防止のためほとんどの授業がオンラインとなり、先生方には教育面で様々な工夫と配慮をいただきました。昨年6月に実施した学生アンケートでは、「総じてオンライン授業に満足していますか」の設問に60%が「満足」「どちらかといえば満足」と回答しています。この状況が来年度も続くのか予断を許しませんが、なにより学生にとって大学に来ることも友人に会うことも制限されます。多くの学外実習も中止となり、不安を抱えていることと危惧しています。長期にわたりますが先生方によるフォローをお願いします。

ご多忙のところご執筆いただいた方々に感謝申し上げます。とりわけ2011年度～2015年度に本センター長を務めていただいた新井隆景先生には3月末でご定年とされます。あらためてお礼申し上げます。(深野)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース「フォーラム」

2021年3月19日発行

発行者 大阪府立大学
高等教育推進機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd-center.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

<編集委員> 星野 聡孝(センター長) 新井 隆景(副センター長) 深野 政之(主任) 池田 華子 川添 充 小島 篤博
高根 雅啓 高野 順平 高橋 哲也 谷口 栄一 塚本 民雄 畑野 快 林 利治 森岡 次郎
<事務担当> 古谷 智美 土谷 弘美